

研究種目	<input checked="" type="checkbox"/> 奨励研究助成金	<input type="checkbox"/> 研究成果刊行助成金
	<input type="checkbox"/> 21世紀研究開発奨励金 (共同研究助成金)	<input type="checkbox"/> 21世紀教育開発奨励金 (教育推進研究助成金)
研究課題名	コロケーション情報を用いた韓国語類義語の記述 —語彙教育への応用を目指して—	
研究者所属・氏名	研究代表者：総合社会学部 教養・基礎教育部門 准教授 須賀井義教 共同研究者：	

### 1. 研究目的・内容

本研究は、韓国語の学習において初級段階に位置づけられる語彙のうち、日本語の「終える」を意味する韓国語の類義語である「마치다」と「끝내다」について、コロケーション(縁語関係)情報を利用した意味の記述を試みる。具体的には、電子化されたコーパス資料からそれぞれの用例を抽出し、それがどのような語と共起しているか分析し、それぞれの差異に着目して意味記述を行う。

### 2. 研究経過及び成果

本研究ではまず、「21世紀世宗計画」(大韓民国・国立国語院などによる)の形態素解析済みコーパスである「균형말뭉치(색인)」のうち、「문어」(文語)のデータを利用して、「마치다」(他動詞のみ)と「끝내다」の用例を抽出した。用例の抽出には同じく「21世紀世宗計画」の成果物である検索プログラム「글잡이Ⅱ(색인)」を利用した。コーパスから得られた用例は「끝내다」が914例、「마치다」が1314例である。本研究ではこの用例を元に、それぞれの意味分析を行った。

それぞれの語について、まず辞書における定義を参照した。国立国語院の『標準国語大辞典』によれば、「마치다」は「ある仕事や過程、順序などが終わる」(翻訳は筆者による、以下同)、「끝내다」は「끝나다(終わる)の使役形」とされている。なお、小学館『朝鮮語辞典』ではいずれも「終える、すます」となっている。逆に、小学館『日韓辞典』で「終える」を調べると、「마치다, 끝내다」の訳が与えられている。また、任洪彬『韓国語辞典』によれば、「마치다」は「事柄の完成」という側面を持っているのに対し、「끝내다」は事柄の完成だけでなく、完成前に途中で手を引くことも指し示すことができるという。辞書の記述としては任洪彬のものが比較的詳細なものであるが、韓日、日韓辞典の記述を見る限りでは、ほぼ同様に使用できると学習者が考えてしまう恐れがある。本研究では任洪彬の記述を参考にしつつ、実際にどのような語と共起するのか、その分布の違いはどのように表れているのか、用例を元に検討した。

本研究で収集した用例を分析した結果、以下のような見解が得られた：

1) 中心語(ノード)、すなわち「마치다」「끝내다」自体の形態を見ると、「마치다」では勧誘や命令といった形式がほとんどないのに対し、「끝내다」ではこれらの形式が散見された。このことは、「마치다」が自らの意志を持って何かを「終える」、あるいは「終えることができる」場合には用いられないことを示すと考えられる。

2) 目的語として共起する語のうち、「마치다」は「학교(学校)、공사(工事)、과정(過程・課程)、교육(教育)、미국방문(アメリカ訪問)」など、ある程度の期間を要するものが多く見られた。対して「끝내다」の目的語には何らかの傾向が見られるという訳ではなかった。「마치다」で用いられず「끝내다」に多く見られる目的語としては、「일(仕事)、통화(通話)」などが見られた。この点は『標準国語大辞典』の意味記述がほぼ当てはまると考えられるが、実際には「끝내다」「마치다」とともに用いられる目的語が多く見られる。例えば「학교(学校)」はどちらの用言でも用いられるが、「끝내다」と共起する場合には「一日一日の授業」といった文脈で用いられており、対して「마치다」と共起する場合には、「全体の教育課程全体」といった文脈で用いられている。こうした目的語の共起に関しては、今後より詳細に検討してみる必要があるだろう。

3) 副詞的成分の共起としては、「끝내다」では「빨리(早く)、급방(すぐ)」といった副詞が共起するのに対し、「마치다」ではこうした副詞の共起はかなり少ない。また、例えば「~내에(内に)」のような、期間の限定を表す表現は「끝내다」と共起しやすく、「마치다」とともに使われることは少ない。動作の期間を限定するという点では、「~만에(だけで)」(例「불과 57초 만에(わずか57秒で)」)などの表現も、「마치다」では共に用いられた用例が見られなかった。

その他の共起要素についても引き続き検討を加えている。これらの共起要素の分布が「마치다」と「끝내다」でどのように異なるか、その違いの指し示すところを、辞書記述などにどのように反映させるか、さらに検討を加えていく。

3. 本研究と関連した今後の研究計画

まず本研究でとりあげた「마치다」「끝내다」についての記述を行う。その後は同様の方法を用いて、用言だけでなく、副詞などの類義語記述を行っていく予定である。また、こうした類義語の記述を韓国語教育の現場でいかに活用することができるかといった、活用の方法についても合わせて検討していく。

4. 成果の発表等

発表機関名	種類(著書・雑誌・口頭)	発表年月日(予定を含む)